



中村俊定文庫
文庫 18
541





大簇



花鳥流 暖 着 かきこも 飾 葉

樓川

まきまきわけかの 濱そり 此 意

許一

傳 けをともひの せきく 身 ねりて

登舟

風いふふそや 来れそ ちかひ

田女

坂河より 月又白よきや 戸 美 婦

壺籠

松 虫 ありとに 枝の ぬきく

恭里

早きまのうらまへて出。神のさ先

枕牛

水うらまへたひらひら此後

喜雨

かけ受受あはさけりう動あてず

梅坑

動切きうらまへ乾き砂

梅山

うらまへおつかけこれ仰ふらと

藍帆

葉あはさうらまへその先も根

振響

いさゝ火のあはさうらまへ有明

理砥

屏追ひまうらまへ澄れおんく

扇川

はうらまへうらまへうらまへ

壺流

汐うらまへうらまへうらまへ

梅坑

火の子流あはさうらまへうらまへ

登舟

神うらまへうらまへうらまへ

泰里

彌歌れ歌うらまへうらまへうらまへ

鏡口

よらまへの水れ音あはさうらまへ

一巻

夾鐘

相しる此時のもち波を鐘

梅川

午時の勤も川ささる重

荳明

うねうねに物見を懐き一も来て

梅坑

雲の垂れ乃の只雙に如

春里

のろしり蛇穴に入る月の歌

冬舟

坪新法流れもささる

詠口

病人よいと同建切の秋さし

田女

雪の華を散らしたる花

許一

ほろろと又秋白と雨ふりて

柳牛

旬のちやこゝろふかき

壺乾

あつちの秋更なる言當り

年月

いささきづり此清きよき

鳥雨

六のころに秋さしきつる花

扇川

きささくわらふ花の山麓

万花

六秋の市の前運ふ秋舟

梅山

江にれ舞ふ花の秋

振響

秋の花に秋さしきつる

琴音

秋のさきつる花の山麓

遠之

秋のさきつる花の山麓

下系

秋のさきつる花の山麓

扇川

秋のさきつる花の山麓

一帯

秋のさきつる花の山麓

梅山

心とちよの響き成るのゆえ刺し
九年

船のしるしは此塔から伝ふ二
梅悦

正西より来る風をよめる舞の舞
泰里

おぼろの影をよめるちんちん
枕牛

まじりの時とよめる城のやま
許一

復たけきはれろくま
冬年

おぼろの百口知りし名は月
壽丸

おぼろのしるしは此塔から伝ふ
梅川

人まはあまの秋はるるを
萱明

いうねる方をよめる子
年月

あつしと文をよめる連子
鳥雨

札のしるしは此塔から伝ふ
一巻

おぼろのしるしは此塔から伝ふ
万花

喜みおぼろのしるしは此塔から伝ふ
田女

姑洗

紫しよてのうさよー野れ日るる

栲川

言れしはけよ六田法喜柳

泰里

從侶師 翁也まうしれき柳て

許一

奇さいしあも子さのさつ

栲地

日よりけ拿子るる戸法音也ま

香雨

脊戸の島れ紫松釋ち

藍明

松より火のおと成掃出は船もき

琴英

きぬと下れきんかき

九華

以一夢入劫の流歌らさし

橋山

鳴くいとまうに又あま

枕牛

相ふれよさらけ書り溜り

理張

遊うれさうの積約かせ

詠口

側くしは松の影成る遠く

臺就

花の君は今ふさふさ初

田女

美しき人丸糸風も

宅舟

波干れ流さるる雲

許一

ゆきくともまはるは

万花

月と花をよみ破るら

午月

雨戸たきむしりて

藍帆

いさむ切らばは

振海

遊りてはあはれ

恭里

ちりきりしるは

詠口

かゝる秋討の報は来りて

許一

並木はきれ罪あるき

扇川

一面に中務の報のきりて

下系

毫もいふ事なく秋

梅江

吟と月浪あはれきりて

九年

際と心はつれあはれに

翠英

急をいひ終らぬかきりて

枕牛

波の平とて無きしは

理瓶

かく此味ゆの仕入と客の中

遠之

一村に子能くは

梅川

あつとふ物使ちりて

田女

遠くかつと音つ

藍船

あつとまの蒼たは

枕牛

あつとまの吟は

壺松

仲呂

かききりゆきいづれにかんこき

梅川

月うぬけきく卯の花意

卯月

習はるるふきをけりけりけり

琴英

治利の形も小は流河

吾雨

西凡の心くかきくくく

理流

み流野川のさきき橋

扇川

弓杖より起る武者此より亭
梅涵

そのの奥にきりきり花
許一

湯のうら桶のうらまへ世にやま
恭里

ちや初宮流花らやし
鏡心

家くれば具成るを此傍馬
梅院

六より一より一舞きと此言
春雨

より合へんきりきり花
春龍

所白くよと舞う湯
現珠

荒沖の模様うらまへと一杖
心母

魁のうらけと舞うと花
琴英

浪名も思ふ月の輪成此奇合
菅明

花下に紅葉も花も下ア言
枕牛

あつと一花柄も花柄と構是ふ
万花

出つと入私かきと母
一磨

勢つとほくまぬとや
田女

菱花に湖の近ひし所
梅涵

きつて本れ為来ちあうく横を登る

遠之

中よりと舞れさき追利

梅院

雨の後さうとわい濃潔

子月

朝はさきわく別々敷き

梅川

君向い阿国祭典、是成言う

許一

うけらう一嘆一踵うら

春之

玲々々物に抱きさうさう

枕牛

生かすなまのぬまに海

春之

ウ

長穂の船夕ねき萩徳露

一巻

ふとと徳命のおと一廻く

梅山

まらくれとらましく少松あう

扇川

あつと陸まき一乾のあんし

百花

唄さうと陸のまなれ梅さう

琴英

いさゆさうと目と目

吃舟

遊瀆

ささりや比へむすれあめらる

梅川

かゝるき亭の登壇故也

枕牛

頼杖の座のやまの徳使よ

恭里

音れはくは志の海を

冬舟

橋列の室をもて懸れし

梅院

かゝるきやふを

田女

わづらひの海にぬきまもく

梅仙

姉、妹、あつた人

許一

志あるとけ袖の香気なると

香雨

日といろくよふふ

遠之

川縁に指しと初日の花

振雪

葉うらと切て度る舞唄

梅坑

交際を以指入ると長うた

万花

幕くらと上寸酒籠新の古

理民

磯やうれ高なりとに残る月

扇川

雲の小ふれ花はなると

香雨

松風舞よ下戸の巻の初葉古葉

吃舟

日うれ一日ちうやんく

振雪

遠空の松皮と神に信着く

松牛

仰、とささむいあえの歌

梅川

勢い、と雷に埋火壺也

駮英

積度敷のあまひかお

岩上

うす葉の波らうがらん帆子紅

田中

貝れこやー世大れ喚集

名月

花くよ破い物子の花咲き

理砥

日く系る殿志所忘日

龍口

敬腹せ飯ふ夜よさきさき

壺籠

とととや表敷の板柱をよ

枕牛

如秋と孫れお坊志地るや久

遠之

筆よき〜〜月れ照陰

梅仙

聖のりれ角力ゆ〜と達部

梅川

とらえふ〜〜まき海とり

壺籠

十から〜一二のあふの出まわりと

龍口

とととや海〜とる尾坂口

九華

花見〜〜ち屋よとくいんさうと急

許一

叶ハ〜〜ちあ入のいや生い

琴英

林鐘

嘯をまてわれは事足るに地分

お川さ日と終人一帆の飲

菱池さく流る流孔裾分る

榛のく小歌らるほら

目孔よさ小松様織者る月のあ

作向さるるつ居る群

梅川

百花

梅江

琴英

田女

松守

秋^ウゆつく大門少のき平林と

車軸がーと面をふり

あゝと火の子運ふ夕暮

火焼とや〜西家の庭

月やきやお掬女と名もきと

よの降〜と落ん細眉

乱菊の色き〜よちの〜と

さる旬は宵の月をき

壺就

理珉

鳥面

橋川

許一

登舟

橋流

雛口

いふ事と酒をり新を配り来て

清き事更ゆるよき人の心

あや川きつる相輪標も花の中

新〜は〜と〜と〜と

懐〜も〜と〜と〜と

葉子の唄は麗〜と〜と

揚子れ舞ふ〜と〜と〜と

垣根が〜と〜と〜と

燈明

橋流

暮里

卜紫

枕牛

鳥面

万花

田女

梁評 骨痛方

暑 芥子 蜂

兼題青田二首 花丁古泉 二年

當古之氣 甘 玉液丸

如雲生於 油 之

一々海にちりてはるるは
 世にゆくまを皆去り
 軍師は百もあはれは信はる
 唐首は少りも勢は繁き
 地まき雲をくたさき橋の
 くら交ゆく橋かきき
 夢しらに現は月を流しや
 日名に疎く橋は流陽陽
 枕牛
 臺院
 龍江
 許一
 吃舟
 橋圯
 遠く
 扇川

遠くまき橋より平着か
 細くまき橋より山に
 上りてはるるは信はる
 唐首は少りも勢は繁き
 地まき雲をくたさき橋の
 くら交ゆく橋かきき
 夢しらに現は月を流しや
 日名に疎く橋は流陽陽
 枕牛
 臺院
 龍江
 許一
 吃舟
 橋圯
 遠く
 扇川

夷則

揚屋おろく大門もかてと御の秋
ぬくもむけはや雲中垣
いとよまのくまふ麻の遠きに
燃さうまうり寛れ椎柴
とろれく意まうらおれまの舟
冠をう欠の移るいさもの

橋川

壺沈

香雨

橋院

遠之

許一

さくら風吹ぬくと初うまき

笛とかきり老原にい

なごころに物さぬ中成備り急

二日旅ひとかゆきとあ雙

いさくは花事なるふ言はく

そけいかきり白物

乃ほつよさや一浪山を浪片庇

股引うきのされうぬや

森川

梅山

琴英

理張

一巻

名兩

菊花

田女

月入る風を剣波きの月

葵の月とされは鶴北漸

禪房ハ舞宴一さ花浪時

きくまきり大籠さうこ

聖ころ山さへいつさね柳さき

古ふさやと母のちさき

人集ハが一あさ一肥一さ一ち

常や一さ一れ一逢一梅一柳

枕中

年月

冬舟

菅原

梅院

琴英

田女

下系

きくくくくくくくくくくくくくくく

梅山

浪の敷くくくくくくくくくく

恭里

かかかかかかかかかかかかかかか

臺花

腹くくくくくくくくくくくくくく

乞舟

わろくくくくくくくくくくくくく

龍口

くくくくくくくくくくくくくく

万花

きさ海くくくくくくくくくくく

午舟

ふふふふふふふふふふふふふ

枕舟

市人の海くくくくくくくくく

許一

長き何くくくくくくくくくく

梅川

わくくくくくくくくくくくくく

梅山

半更あれふのめんく

理瓶

静さハ琴くくくくくくくくく

茶里

くくくくくくくくくくくくく

龍口

南

秋ノ露 涼き方よ 枝の露も

しやめ 光ゆる 竹の庭下 秋

新ちくく 乃鳴わさる 夕日

いづる 常流の 水さる 葉

ゆゑに けしき ありて 川の

秋の 鱗と とも 入 柳 橋

橋川

橋院

壺院

龍口

赤里

吃舟

きんぐらうたにちかひのしづ

あきさきのあきさき

笑ふたうしうたのあき

緑のあきさき

あきさきのあきさき

あきさきのあきさき

あきさきのあきさき

あきさきのあきさき

一

田

鳥

万

枕

梅

菅

扇

門のあきさき

あきさきのあきさき

あきさきのあきさき

あきさきのあきさき

あきさきのあきさき

あきさきのあきさき

あきさきのあきさき

あきさきのあきさき

梅

理

下

鳥

琴

鳥

鳥

鳥

雙を結ぶ馬車形くまらしくせ

樞をわけしむ大釜の下

べ村の名さくろくさく今泉

らう月とまきも傍うぬ華

写し絵に小町の瀧北をまいて

而相言れ相曉て月の秋

かす鈴の音了物かく思れ結

かんと坊志ありまきり

香雨

一巻

鏡口

荳の

田女

枕午

万花

壺枕

羽子も来りちうりあもあまかき

あしはしりあききまに曉る

堀端の一挺きくも初秋鳴り

小鳥のれ舞と陸這に斬

あそぶあき葉のふれは月見

あまのくまきんらまきり

志里

琴英

一巻

橋川

壺枕

許一

廿九

十之相月しかりて本此有乳

梅川

露花ささりて流霞を数く

梅仙

順行又司名をら連てあし

万花

廣斗越音は海をく

一底

夕らあさうまれ海静

一壺

煙花馬よき流山際

梅悦

ところをと物さうらうとのまりあ
 母のまゝあれむを免三人
 あの中へ入し白火いふまうり
 よとくもあふまうりの梅
 此果と雷に毎く流るる
 二又月あつたおのまをさり
 かえ物と振夷れ流るるまうり
 ち系かゝるふと母に流るるし

許一
 春里
 枕牛
 壺沈
 許一
 春里
 枕牛
 壺沈

わるれさあつたあつと花色
 面のあつた流地をさうり
 日此御も己約道さうりの月
 一葉ふれ也むはくさつ換桶
 うりくや遠くもまぬる流の秋
 笠戴きさうり照れをまうり
 入隣子も縁りあつたあ
 まうりきれくの輝れ初舞

許一
 春里
 枕牛
 壺沈
 許一
 春里
 枕牛
 壺沈

津波の松林——松も也——

許一

きりぎりすのまきと草花の樹

若里

松へまの髪は揉みぬるま糸

壺松

ふぢりぢあゝ都るう——

枕半

志き司のまきとく——

恭里

あゝまきとく——此市は賣物

許一

ほろ破れ風や——うきまれ月

枕半

あゝまきとく——

壺松

ウ

かゝくや赤貝馬の口取——

許一

あゝまの時——小雨ちりく

枕半

浪あ——に佛れ箱のいぢり糸

壺松

いぢり糸と我はけりまきり

恭里

あゝの秋をうらみ花も——

橋池

うらみ花も二月三月

終口

恋鐘

と都雪やあぢきまの城池水面

橋川

芦の根やう鴨孔のささ

香雨

布衣の徳のうらまへ帯めて

年月

歌のうらまへにやけり

枕半

片底の草の月此宿

琴英

まろの望のうらまへにやけり

毒丸

養子なき法師一人秋のくれ

泰皇

素うろよく歩む我不

梅仙

夕暮にうつる白浪浦りも

一巻

聖の青れ輪の中よき徳

万花

お免やうけはつる稲垣うら男

光舟

歌も——いふ所れも歌

梅流

ゆゑの思ひもさうり花見より

理珠

さきこれ言のまは徳橋書

荳明

いとくハいそぐは厚れ相傳り

許一

唄もぬの秋浪横好

梅川

きくもるやうれ津よこもさき

梅仙

ちきも是んと六の朝月

田女

大らに子駒の懐れあやふさり

名雨

松葉よこしよ道ふ徳書初

登英

ほの思ひてあま中床かすの月

毒龍

風もさきよこしよ徳書初

年月

阿^ろく^ろし^ろ 林橋^{りん}と^り流^りへ^り 木^きと^と流^り瓜^か 橋^{はし}川^{がわ}

福^{ふく}も^も唱^なり^りて^てき^き 以^も物^{ぶつ}佛^{ぶつ} 泰^{たい}里^り

か^かさ^さな^ない^いら^らな^ない^いの^のま^まき^き 万^{まん}花^げ

き^きれ^れる^るは^は大^{だい}に^に独^{どく}り^りの^のゆ^ゆ 橋^{はし}江^{がわ}

と^とほ^ほく^く一^{いち}二^にの^の格^{かく}信^{しん}備^び如^{ごと}に^に 枕^{まくら}牛^{うし}

何^{なに}れ^れ世^よ素^すれ^れま^まる^る 理^り張^{ちやう}

稀^ひ人^{ひと}の^のま^まる^ると^との^の八^{はち}日^{にち}を^を 橋^{はし}境^{がわ}

ま^まる^ると^との^の海^{うみ}成^{なり}と^とる^るま^まる^る 吃^く牛^{うし}

押^おし^しる^る秋^{あき}の^のま^まる^ると^との^の秋^{あき}の^の夕^{ゆふ} 田^た女^{にょ}

武^ぶ庫^こ標^{ひょう}集^{しゅう}と^と記^きる^る風^{ふう}雲^{うん} 枕^{まくら}牛^{うし}

古^こ病^{びょう}の^の如^{ごと}く^く 既^{すで}に^に痛^{いた}む^むる^るま^まる^る 臺^{たい}沈^{ちん}

い^いま^まも^もと^との^の心^{こころ}に^に悔^{くわい}滅^{めつ}し^し 汗^{あせ}一^{いつ}

原^{はら}の^のま^まる^るは^は物^{もの}き^き物^{もの}な^なる^る 蒼^{そう}的^{てき}

竹^{たけ}の^の林^{りん}流^{りゅう}澄^{じやう}枝^えと^とも^も 香^{かう}雨^う

黄鐘

松林樂也極の下りきりく寸

人の物をも雲れ志る張

たこ堀よりハと交り呼ぶ事

ぬる時之時とれぬきりき

号梅より多深きり松の月

風定きぬ秋意深き

梅川

登舟

蒼明

許一

菊花

梅院

やうきく 初めた名れわきしれ 九華

うき利もも女なりを祭 翠英

大けくも青すく地家れ火并境 鳥雨

畑の翁子濃るれめ新赤路 藤川

いんものに掛ふ馬鹿は首れ泥 梅仙

争い流波合もは火ちる飯 理既

捨さすもは好れもむたぬのやう 下系

あうよも中へ日の川さよ 臺然

六のあうちのき野も流鏡のき 川舟

行り利もも瘡忘れ 梅仙

遠海程ふ使のされ提く 梅院

縄のすもれのくも云ん 蒼明

口ぬくはらうも此産新と約 年月

ありはもはうく 神乞 梅川

かおまもつる山諸からまをく 毒丸

るのやももれ何中もれ嫁 田女

園一き師乞の果流的車一

琴英

頂キチウとさう残る不二

雛口

涯にちりゆれき一も、椽の端

恭里

腹止〜〜〜〜〜底以破き

多雨

想けハ惣傾きけれお〜〜

万花

落〜れ折ふ秋のせき

九年

たの竹の折き切〜〜〜月々

枕午

庚申塚一辭終ふ事

卜系

急〜〜と名をの承れく肥く

理砥

糸〜〜と夏ぬさ針に指帯

午月

半〜〜と越志〜〜〜湖〜〜

扇川

志〜〜と七日〜〜花のま

恭里

そよ〜と遠見と白くる松流物

許一

多〜〜とま〜〜と田螺〜〜

万花

初まに思ふ少神哉をのしきま

理珠

休あろとほよ一の糸を

卜糸

高川起つ木のそはゆるきれ

梅山

日脚かゝ消れを朝に清雪

一雲

あつし今れまゝに為しきぬ

田女

かりひまのこゆるとえゆる

許一

晴れ秋かゝこの秋を色うえに

笠舟

空をよるよけのこゝろを

枕牛

月のあそびおくるれきんきゆう

番雨

うしろく歌はむの鳥猪子

荳的

さうと物等ひらき清寂を

毒丸

他のくらくとれきん角らむ

梅院

わらくそ蟹也地生の光を

万花

これら遠ききおの依勢

梅池

舞つまゝ目もはらぬ美の雪

森里

長き岸より波吹ぬおれは

午月

まつへのあふふ月あはれを

下系

かききききききききききき

理取

おちのちのちのちのちのちのち

極端

くくくくくくくくくくくく

麻川

きききききききききききき

遠く

きききききききききききき

毒丸

きききききききききききき

一巻

きききききききききききき

九年

片隅を食ふ気だしの病戸柳

片一

きききききききききききき

蒸里

尾帯成りきききききききき

万花

きききききききききききき

誰口

人のきききききききききき

田女

おろくくくくくくくくくく

枕牛

あきかしの雪のふりかへに初夕日

揚子江流平の碁にそく其の
歌ひなすく

松梅とつゆあや如流す何れ先

そよ葉

雛成女のかげく目流せわす貴

杉の葉拾ふや流葉佛に成

南都産松とあす六十初夜の出雲

あす双葉の雪屏や松懸子

徳実

流るべきや松のほのくや鳥川

梅

あす六光れ暖わすもて也雲逢き

梅の葉見にあらそこのいそ給心

流るむらぬと色生をたふさ里

木暖るは知る人そく梅れ心

暖かすしきあふれ日の雪路の物

猿一あまのこ

心小舞慶又行き記も養北外

号

くらけ守流竹の結成あまのこ
まの飛流や黄梅よこも並北外

柳

沈潜自得

まこよこ結成あまのこ柳よ

心一まこ守流竹の結成あまのこ
まの飛流や黄梅よこも並北外

猫意

心一まこ守流竹の結成あまのこ

号

心一まこ守流竹の結成あまのこ

号

心一まこ守流竹の結成あまのこ

童然と心るを懐けりて

唐心童——ちえに拙抄る由

拙抄

振川也夕紙とゆるる今戸橋

唐心

九重の外もかた心也唐心此鐘

唐心

堀り——さくら見入るる唐心

あゝ人九十の奴

九の十う百ちれ善也唐心此鐘

初年

ま川也也唐心方まらるる唐心

初年也片暮るに唐心唐心

唐心

初年の月影も唐心唐心

唐心

死念の子母あ代や孫らん像

増原

蜂の巣や蜜の河小ハ名司

籠子

日の丸の傍敷く棒籠よれ群

洋一紙いさきんくきんく

目と年一也苗代時のあす北系

怪

常哉松玄くむれかひ所引
すれくハ也新田北怪う所

菜意

菜の花や松葉は角ハ孫る雷

曲水

あさやまきそ破く初鳥

枕

こゝろ笑さすは初花は夷中系

離

いけ子のきまーわとて女の
戸極のよりあし

かきくさぬかきよきくよあ離

きんあやわらう紙船の画と歌く

離あきし男とまはれま女新

汐子

こひぬの汐針さぬれ汐子

楓

下戸逢の山ぬれ破くさく物

大流一横くさぬれか端楓

とせらるる楓

傘にちかぬからくかすゆき

市原吉田道徳也一筆ゆき

山風かかぬかきぬかきぬ楓

六六川と歌く

かきぬかかぬかきぬかきぬ

かゝるはるる

海棠花多しをばふらう

花

かゝるはるるをばふらう

かゝるはるるをばふらう

かゝるはるるをばふらう

葉

氏よりと糟の音や花のたれ

白子に原をより市との風景をよ
かゝるはるる

美しき湯坂のゆるりすなり

躑躅

坂へ杖増のけりけりけり

之月遊

美しき湯坂のゆるりすなり

夏

裾袖の雨にさらきりー文衣
きぬふまゝかむえなりーく変れ

卯忌

卯れこれの園哉知ぬ垣根子

朝

ほろろくはくはくはの路れふ暮れ
控鳴く途少くすまひなりぬらぬ

おしんかおしんかおしんかおしんか

おまげや二羽きり海の小舟

川と／＼新の流は流は流は流

布袋の欠きー画ー

物遠をそれあつたの道かむす

何ーれらあゝ庚申の秋

きつ指を片ふゝゝゝゝゝゝゝゝ

灌仏

灌佛也此のまゝおと茶法煙

杜若

道もこのまゝ成垣根也かあつら
沃解の狭かゝる也

鯉

天より也 霞も人取れも川根魚

牡丹

節白也まゝのまゝのまゝのまゝのまゝ

昔もらてほんどの飛タマノ如

情も〜 魂のは〜 花も白あ〜

芍薬

まゝの念此情も〜 花も白あ〜
花も白あ〜

龍胆

まの根やまゝのまゝの根あり

凍散也

かんこもむしあふるおさほのし

筆

中みよの指さくくお二日

系極

きんかきくおんかきくくくく

名

追ひりくく月よきくくくく

夏よりあきくくくくくく

これき唯きあきけた道
み藤ハタ敷五川はあき

もくあきくくあきくく探よ親せく

はらハ小田原大入保屋あり
麻西よ白くくくくくく

お月る

あきくくくくくくくくく

お月るの一夜よあきく

はみきくくくくくくく

あきくくくくくくく

お日るやらのあはまの八雲殿様枕

鶴の舎

縁合とて寺堂の前のれきし

紙作玉道成

泊湯を多くく尾のなり 帽牛

吉田二位殿より数多き人
神号は多し

あきしき神はあまをいれ高

田植

女あらし世を治るぬ田より時

吾妻北条あし

神のまはもたらはるぬあらし

平井をく

まるとし抱澤 沼のふえい

門入宗原庵をあつしその初云
牛のゆる日はあつし

わの井れあつしは 老を交すあ

故を

あけならんことよも北の山にむすむす

夕歌

いふところゆや夕歌柳のまれば

能因法師の賛

いふところゆや夕歌柳のまれば

瓜

瓜はくち喜回法中のまの葉瓜
地路より伝ふにまの葉一卯ふ葉

花はくち實に去用れまの葉瓜

豆

玉川の毒を飲まぬまの葉瓜
雷に似て鉄の糸束れり何と云
おのまの葉瓜をまの葉瓜
まの葉瓜はまの葉瓜

能因法師の賛

あけならんことよも北の山にむすむす

園扇

刺みそかゝるらに松川ち

意沃みく

魚さくまればあゝ磯也風さく

海の女れ甲智くき城えん

指く雲今沃指に流う南

清水

匹如身 せしすこもを指く山屋さ

洞涼

斬きくく川か柱れ流の音

帆く骨せおきく涼むおようさ

長無山めく

雲山流ちのちそきく海さく

ふそき山えおとらく越近唯鏡

變海くく

意好石きく木改め先も後も

陸林河段への脚成送て

杖銘曰千里同行契此君

杖持く高きや杖履の竹婦人

蓮

蓮咲く明六の浄土あぢいれ

極生庵の山荘へあつて

静 事夏此のあぢいれと坊

夕立

いそやち成東の河へ此人

溪の尻あふ

餘波措く新成陸の山人遣

秋

溪松の嶺をたふして秋

初秋や片枝ハあけさる日

葉掃くるあけさる日

子勝之の位と入古きそ秋の風

善根深長れあり

七ツの湯あふれ八雲人かーかせ
湖ーもこれ孰あ糸あす此川

やーかーと人形遊遊ーと

女たき少のちハ日此阿ま徳河

買糸

徳と此舞のすもともあつて

生く花の身のもつたは雲の月

所より及成さやちあ養ふ

格書

心あつたは洋まは障れ桐柳

輪はまを圓のうつ徳光堂

素と松あけ柳とまう

句徳の服あけまれ秋の徳

吉徳

井此まのくまらうのちあま

44の宮の二り
あひぬ西風

名成らざるものも落のなきけり

むししき風のなれまて子に秋の月いよ
くハ側 居れぬなりきりしとされ成
あしし初秋始又その年のけりしとされ
存よき中居るの門あぢきと

児のせくむらふみあつと捨つる

躍

人あらしまらくくくおきりり

秋もぬし目もと平に七つ

お撲

夕露のむきいよ未だ仲角力

経解れ力まらるしと未だ仲角力
すけりて

無事と好む海月かあしと

秋面師の極れあま

ふ白き花とこの果きつはと

海貝

葦のふはなをやかすあ

風をたぬくし葦のふはなと
かすあ

あさのほろとくふれ横へるる

出

元結の車やうりや色は輝

蘭

増し似る針や一葉のふりや

如布花

あさうしは外結の床や色は

あさうしは外結の床や色は
あさうしは外結の床や色は

あさうしは外結の床や色は

詠

あさうしは外結の床や色は

あさうしは外結の床や色は

あさうしは外結の床や色は

詠

あさうしは外結の床や色は

あさうしは外結の床や色は

終

うかたれ 細葉 ちかたれ ちかたれ

祖翁の函贊

ちかたれ ちかたれ ちかたれ

ちかたれの ちかたれ ちかたれ

ちかたれ ちかたれ ちかたれ ちかたれ

ちかたれ ちかたれ

新 ちかたれ ちかたれ ちかたれ ちかたれ

月

ちかたれ ちかたれ ちかたれ ちかたれ

名月や 柳の ちかたれ ちかたれ ちかたれ

明月や ちかたれ ちかたれ ちかたれ ちかたれ

暮も ちかたれ ちかたれ ちかたれ ちかたれ

名月や 柳の ちかたれ ちかたれ ちかたれ

早のちかたれ ちかたれ ちかたれ ちかたれ ちかたれ
夕のちかたれ ちかたれ ちかたれ ちかたれ ちかたれ
ちかたれ ちかたれ ちかたれ ちかたれ ちかたれ

聖 聖人 河 河 方 方 此 此 望 望 月 月 見 見 月 月

海邊何しのとてま

片際くくくく木の舟見え

まの枝やまのむらさきさうの澄

暮月結巻

大空くくくくそのくも月

あまのついでに

あまのついでに

聲多くや園は垣根の鳥爪

雁

まの原や片田くくく片下り

初雁や後雁のさきとま

柚

初あくくくく此の柚の枝とま

うたは女隊川の先よ

鬼灯の光はまのくくく

親子の顔

娘の顔

芋切つとまのくくく味

初草

はつたての草花をよみてはるかに春の光

景の趣をよみてはるかに春の光

菊の白をよみてはるかに春の光

古草

赤い花をよみてはるかに春の光

はつたての草花をよみてはるかに春の光

菊の白をよみてはるかに春の光

九月十日

峰一はつたての草花をよみてはるかに春の光

草

花の白をよみてはるかに春の光

菊の白をよみてはるかに春の光

秋草

花の白をよみてはるかに春の光

菊の白をよみてはるかに春の光

之夕の縁

い横はしとていさひー秋の美

麻

湯女の卜法履を穿た物若此詳
山畑や廣のやと向さからー

紅葉

おま宮とあつたぬ峰のお葉の
おまうまを就まもみらくる

わの原より又をわー高れお葉
さうほやくと平家此寺のまらる

美秋

られの秋あはちりき入のれ

小笠原氏の川花之又歌みく

り秋のまう小まは舟の人

美く静賢

髪利く世事れれれも長らる

き

わさささささささささささささ
さささささささささささささ

ささささささ

はのささささささささささ

本松

ささささささささささささ

ささささささささささささ

ささささささささささささ

ささささささささささささ

ささささささささささささ

雲

あさささささささささささ

ささささささささささささ

ささささささささささささ

松野

皇凌一人目かまのた鳥

天治の地紙の形をみく

皇凌一也塚よ木の系此倉山

昔意忌

とち成忌や花の魂うくねをき

昔意忌やうあきくくくくく

梅境よりと成忌の在跡れ昔と得て

枯草やこのぬるはれまふ

藤園

乃成はむ振う馬場のゆん

冬花

咲くくくくくくくくくくく

戸北くくくくくくくくくく

寒

山守懐春中子流のけむき

鳥かたを除ふくくくくく

かゝ贈へ根あるも松の斜むる
いゝ〜川風さ〜裸山
情〜色ぬ降庵毒此は甘〜

多智

多智濃是の世〜き浮世これ
水空り此夕日〜花散田者散

例時弁位〜

吾いふ此はあ〜花浦子

好花

燈の〜き世〜ぬる〜

小燈差〜

口切也燈の〜と〜

志以須海

志以須海言跡を以福〜
鯛の華濃源八〜

帝衣

等々世世子米の如く紙子扱ふ
竹のかりく後家志かこ乳

河豚

子代強しき踏あらしふく汁

海胤

北風北吹又狂きまじりて

顔見せ

魚を煮て汁を飲むと世に

葱

先くく谷汲汁く福ありけ

糖

海より糖く丸く煮たり貝

汁鼓

辻若れ常買と見ぬ紙くき
粉成送る和をあらとらぬ

水仙

多仙や露は清きの中よ咲

和無

大空やうと下戸てこそあし和無引

鷹

露海へとれり 露やこころ腹

和まきり 露もと路中や和女町

鷹梅 和法僧成ひとるを

室蘭

空きくや梅もさくくと露の夜

袴巻

ちりる露やふきり 甲斐孔約

雷

大由ふや百もいふも不二の裾

雷の巻をこころあふや梅り下

枕詞に十をあらはれぬまゝ

雷と露はうらむしのちりく露

腕八

腕八や新日顔おれ秋加う秋

細川彦一

ハ子代咲くをそれ桂也殿侍と

紫雲

けりしそれ大津と母り也悔の音

あそくて鞠のかくもくも

牛くは市の井とそはよき也

わの門よくみは着の松賞ん

わのきき菊無燈物と無

乾鯉く服くかきひ年れま

と竹也とこしそりく月日貝

蝶ねりしそれ舞あし海も子

お角力物とつて年成惜と

世の波れあふはよけよお

おん ことば せみ とも へ

ちか ね へ ちか ね へ

よ ね へ ちか ね へ

ちか ね へ

おん ことば せみ とも へ

頃 孔 屏 凡

眉 跡 因 女

